昭和29年（1954年）9月7日

姪の夏風鈴が肺結核を発症。結核は治るかどうかは運次第の難病だったが、今は特効薬の抗結核薬が出回り始めている。自分が勤める夏空療養所に入院させて治療をするのが最善。幸い、今のところ症状は軽い。すぐに治るだろう。

昭和30年1月10日

一通りの治療はしたが、鈴の症状に改善は見られず、それどころか悪化。

鈴の体力を鑑みながら、追加の薬の投与を行う。

昭和30年7月21日

鈴の容体は安定したものの、症状自体は入院時より悪化してしまっている。

完治にはほど遠い。別の2種類の抗結核薬も組み合わせて使用する。

鈴が絵日記をつけ始める。

昭和30年9月7日

鈴の架空の夏空町での夏休みの絵日記が、長期入院患者の間で評判になっていることを知る。

地元の患者から、地域の伝承なども聞いたようで、日記に妖怪や幽霊、神様まで登場する荒唐無稽な読み物になっている。

地元の子どもの患者たちから潮音町（となり町）や里山の話も聞き、彼らも日記に登場させて、鈴曰く「みんないっしょに大冒険」をしているようだ。

数少ない彼女の楽しみだ。身体に障さわらない限りは黙認しよう。

昭和31年1月23日

鈴の容体がゆっくりとだが、悪化している。

薬の投与量を増やす。

昭和31年5月30日

理由は不明だが、鈴の結核には、薬が効かない。

手は尽くした。自分の無力を呪うしかない。

兄さんと義姉さんに必ず治すと約束をしたのに。

おそらく、冬まではもたないだろう。

昭和31年9月1日

昨晩。ちょうど日が変わるころ。鈴が息を引き取った。

あの娘は最期まで生きることを諦めていなかった。奇跡が起こって治ると信じていた。

息を引き取る直前、謎の停電があった。電力はすぐに回復したが、そのときはもう、亡くなっていた。

私も、兄さんも、義姉さんもその場にはいたが、鈴の最期の瞬間を目にすることはできなかった。

昭和35年（1960年）7月7日

鈴の症例は結核ではなかった可能性が高いと分かった。

最近発見された、結核と症状のよく似た症状を引き起こす別の細菌による感染症だったと考えれば、あの緩やかな悪化と、抗結核薬が効かなかったことと一致する。

昭和37年9月8日

論文を読んだ。

鈴は結核ではなく、非結核性抗酸菌による感染症だったと考えるほかない。

確かに、今考えれば鈴の症状は肺炎とは微妙に違っていた。

これは言い訳だが、当時は世界の誰もこの病気を知らなかった。

未熟な私に何ができたとも思えない。

しかし私はあのとき、この病気に気付ける場所にいた。

なぜ、わずかな違和感を疑わなかったのか。

別の方法を模索しなかったのか。

それができていればあの子は、あの絵日記のような夏休みの大冒険ができていたかもしれない。